ハイマート
Heimat
ぐんま日独協会会報

1991年11月6日 発行

4号別冊特集

発行者 平形義人
発行所 ぐんま日独協会
〒371 前橋市三俣町3－11－12
☎ 0272—31—7212 FAX 0272—32—4082

少林山達磨寺・観音堂を背にして立つ著者。（朝日新聞「現代人物誌」に掲載された写真から）

〈受賞記念エッセー〉

『もうひとりのブルーノ・タウト』

三倍楽しく読める読書術

朝雲 久兒臣

はじめに

マンガの中の文字ならスイスイ読めるが、ハードトップの表紙本は大の苦手、という人の数は多い。681ページの書籍となると、もうそれだけで目がうつろになってつい書棚の飾物になってしまう。そういう声を耳にすると作者は悲しい気分になる。そこで、読んでほしいと願う心にペンを託して、大作を三倍楽しく読むコツを読書術と名付けてごひろうすることにした。まだ本を手にしてない方には、予備知識として知っておいて荷物にはなるまい。(あとでご購読を乞う、という著者の本意はここではしまっておくことにして…。)

さて、これからの口上が難しいところである。

全体は5つの楽章から成り立っている

まずは全体の成り立ちから話をすすめていこう。この本は5つの楽章からできている。第一楽章は、「心の表白」という頭の部分にある作者の手紙。これはタウトにあてたもので、この本を書く動機や、様々の心象風景が描かれている。いわば序曲である。第2楽章は、これまでのタウトをふりかえった部分で、タウトの生いたちと建築家としての実績を、くまなく積み上げてみた。過去の栄光が光っている楽章といえよう。（2章と3章がこれにあたる)。第3楽章は、新しいタウト像の幕開け—記念すべき創作曲の発表といったところで、曲としては最高のもりあがりをみせるところ。（4章から8章まで）5つの小テーマがそれぞ

れ用意されて一つの大きな流れに統一されていく。第4楽章は、3楽章の荘重、思索、芸術性とはがらっと変って、タウトの赤裸々な心理を、華麗な楽曲にまとめたところで、ある意味ではもっとも興味をひくところである。(9章から11章まで) 第5楽章は、タウトの別離を少林山賛歌として清らかに歌いあげた終章で、題して「星空のグラス・ハウス」。

全体の成り立ちを5つの楽章にたとえて書いてみた。音楽としてはこのまま静かに聴いてもらえばよいのだが、『もうひとりのブルーノ・タウト』は文字を読んでもらわなければこちらに伝わってこない。

681ページを正しく読むには、1日8時間として5日間かかる。これは校正のときに計ったものであるから、一冊の本になった場合は少し短縮できるだろう。自分の書いたものを、くり返し読み返しても5日間かかるということは、たいへんな労働である。作者としての義務感がなかったら、とても1日8時間読書することは困難だし、眼精疲労でくたくたになってしまうのがおちである。

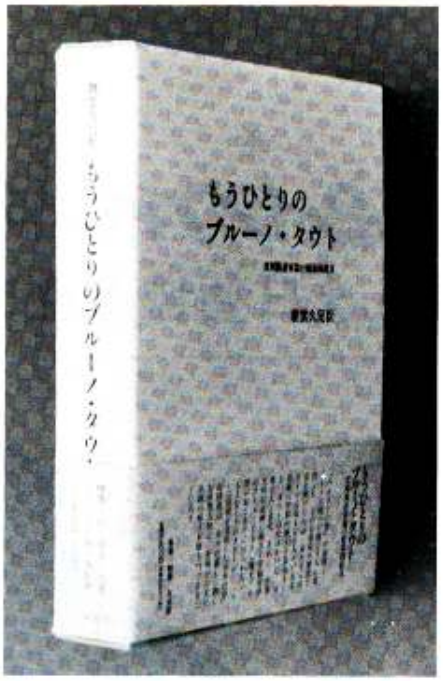
3倍楽しく読める読書術、これから本題にはいることにしよう。「5つの楽章」のことを、頭に入れておいてほしい。

「心の表白」(1章)を一番先に読む

冒頭の「心の表白」を開く。これは作者がタウトへあてた手紙であるが、同時に、読者にあてた書信と思ってよい。作者である私が飾り気なくでている。これは読みやすく書かれているから、まずこの「手紙」を読者が自分あてにきた書簡と思って読むことをお勧めする。

ページをとばして「文学者としてのタウト」(4章)に進む

「手紙」は読めた。26ページまで進んだことになる。2章、3章はとばしていい。4章の「文学者としてのタウト」117ページ。"富士山賛歌""まつり歳時記""桜と紅葉"またたくうちにページは進んでいく。タウトの日記は、昭和初期の文体がのこっているから、若い人にはやや難しいかもしれないが、年配の読者には懐かしいはずである。"旅のエッセー""少林山風物""心の風景"とつづいているが、これらはどんどん読んでいけるとおもう。少林山の暮しぶりが手にとるようにわかるし、タウトが望んでいた清らかな平和がここにはあった。読み終ってタウトの文学者としての観察の鋭さ、臨場感あふれるスタイル、間のとり方、硬軟自在の筆法、しみじみとした心の告白などを通して、すぐれた文学者の姿をみることができるだろう。すでに192ページまでわけいった。文明批評家としての天分の一つを見つけたことになる。



本書の外観
帯紙には精魂こめた渾身の大著、タウト文明論の清新明快な新理論の提唱!
と書かれてある。

面白い読物「タウトをめぐる500人の日本人」(11章後半)

「芸術の観照者」、「思想・哲学の探索者」、「鏡のなかの日本人」、「桂離宮とその周辺」は、「文学者としてのタウト」と同様、天才タウトの文明批評家としての要素を説明する大切なところである。それだけに作者も力をいれている。読むのに疲れがともなう。そこでこれらをいっきょにとばしてしまう。571ページ11章「タウトをめぐる500人の日本人」の後半"人間観察のドキュメント"その6、井上房一郎を読んでみる。現存している井上氏は、タウトを少林山に招いた人物であり、伝説的な風評をもっている人である。風評と現実の違いがよくわかり、文句なしに面白い読物となっている。ここにはその1、上野伊三郎(建築家・タウトの最大の親友)、その2、児島喜久雄(東北帝大教授・美学者)、その3、有島生馬(洋画家・白樺同人)、その4、広瀬敏子(少林山達磨寺長女)、その5、飯塚琅玕斎(竹匠)、その7、日向利兵衛(熱海日向別邸依頼者)、その8、君島清吉(当時の群馬県知事)、その9、柳宗悦(民芸運動の指導者)、その10、下村正太郎(京都大丸社長・京都滞在中自邸の一部を提供した)が、タウトによる人物誌となってあらわれている。マスコミのとびつきそうな話題が盛り沢山に仕込まれてある。

「鏡のなかの日本人」(7章)へもどる——女性論や子ども論がでてくる

648ページまできてしまった。ここまでくると12章の「星空のグラス・ハウス」を読みたくなる。最終章であるからだ。読む人の気持ちとしてはよくわかるが、ここは少しガマンしてページをもどしてみたい。7章の「鏡のなかの日

本人」は、タウトの日本人観というものが非常によくでているところである。日本をよく知る外国人との比較日本人論は、ハーン、モース、ベネディクトとタウトの日本人観をひきくらべた文章で、タウトの公正で、客観的で、しかも親しみのこもった日本人論であることが鮮明に浮きでている。日本の女性や、子ども論は今日でも大きな示唆をあたえてくれる。

「エリカ女史」(10章)の純粋な愛について知る

さて、つぎはどのページになるだろうか。勘の鋭い読者なら察しがつくであろう。9章「ニッポン倦怠」か、10章「エリカ女史」のいずれかである。10章がよいとおもう。9章は悲しい詩の世界であるから、あとに送ったほうがよい。

エリカは、タウトの愛人であって正式の妻ではなかった。しかし、二人の仲は信頼の共生で固く結ばれていた。不倫には違いないがその言葉から、不道徳とか、非倫といった響きは伝わってこない。純粋で、透明に澄んだ男女の愛が信頼というきずなで昇華している有様が、スクリーンの上に見事に映しだされてくるようである。

これまでのタウト像をふりかえり(2章)タウトの日本滞在中の交友関係をさぐる(11章前半)

エリカとの愛を知ることができた以上、読者は、タウトの故国ドイツでの生いたちをさぐる必要がでてくる。2章の「定説としてのタウト像」はそれによくこたえてくれる。むろん、建築家としてのタウトが縦横無尽に活躍し、天空を駆けめぐっている様子が十分理解できるはずだ。そのあと、3章「再評価の意味するもの」に一気に進むのもよいが、チョット間をとって、11章前半の「日記のなかの日本人」と「生活文化圏のなかで」を読むことを勧めたい。有名、無名の日本人や外人の名前がでてくる。くつろいだ気分が読者のなかにでてくるであろう。6つの生活文化圏がタウトを包みこんで、3年5ヵ月の亡命生活を支えていくのである。「交友関係の質的分類考」にはいくつものパターンがあって、生活面の配慮をした人のこと、感動を与えた女性のことなどが、あとからあとからでてきて、時間を忘れて読み進んでいけるところである。

「芸術の観照者」(5章)はタウトの洞察力を100パーセント発揮している

読物としての楽しさを満喫したあと、3章「再評価の意味するもの」をしっかり読んで、「これまでのタウト」を知識の袋に入れておいてもらいたい。そのあと、5章の「芸術の観照者」を読むと、日本の伝統工芸や、絵画に相対するタウトの芸術観が繊細で公平な尺度をもって観照しているかがよくわかってくる。「能」や邦楽、歌舞伎や旅芸人に示したタウトの温かい、それでいて見るべき急所をキチンと指摘してやまない洞察力に、ただただ驚嘆させられるものがある。

「ニッポン倦怠」は悲しいポエム(9章)

洞察力にすぐれたタウトであった，そのタウトが内面の苦しさ、亡命生活の悩み、そして日本を去りたい、と叫ぶように語る「ニッポン倦怠」（9章）は、読む人にやりきれない無常さを訴えてくるところである。作者は、この章を書いていたとき、何回となく心のかしゃくに堪えかねてペンを投げだしてしまった。悲しいポエムである。しかし、ここにタウトのハダカの天才がきわめて率直にさらけだされているのを見ることができる。人間らしい人間の姿がこれほどよく描かれているのは、この章以外にはない。

受賞風景――授与者は、シュルテ参事官。

しみじみと語りかけてくる「桂離宮とその周辺」(8章)

「ニッポン倦怠」の救いは、ラストにいってタウトの待ちに待ったイスタンブールからの電報が到着するところにある。国立芸術大学教授に決った知らせをうけて日本を去ることになるが、あの文章を書いていて私は、心からよかったと思ったものである。安らいだ気持ちで8章「桂離宮とその周辺」を読んでいくと、タウトの「桂の発見」の真意がわかってくる。街景文化の概念をこの時代、すでにタウトは説いていた。今、京都の高層ビル問題が大きな社会問題をはらんで論議されているし、町並保存という考えがこの国にではじめたところである。タウトは、それよりはるかにスケールの大きい「街景文化」を、日本のなかで発見していたのである。

文明批評家タウトを創りだしたのは『タウトの日記』(12章)そして最後のページ「思想・哲学の探索者」(6章)の難関に挑む

もうほとんどのページを読み終えたといってよい。6章の「思想・哲学の探索者」が、読者にとって最後の難関になるかも知れない。しかし、これはあとにして12章の「星空のグラス・ハウス」という終章に移ろう。前段は「文明批評家」というタウトに捧げた称号の意味を説明しながら、トインビー（歴史学者）、サルトル（作家・哲学者）、小林秀雄（文芸評論家）に並ぶ世界に稀な複合天才の文明批評家としてのタウトが、人類に残した遺産は『タウトの日記』であったことをこの本で検証することができた。後段は「別離心象」でタウトが少林山を離れるときの全村の人々との別れを感動的に叙述したクライマックスのシーンである。それに比べて京都駅の見送りはたった4人の淋しい風景であった。しんみりした別離の光景を読者は胸に抱いて、いよいよ、この本の残りの章を開いていくことになる。251ページ、「思想・哲学の探索者」（6章）である。"カントへの敬慕"、"シェーアバルトの宇宙"、"達磨の無"、"神道と仏教"、"多彩な文化論"そして"思想・哲学の狭間で"という小見出しが目にはいる。一つ一つの節は決して長い文章ではない。ゆっくり味わって読んでいくと、タウトの思想・哲学――すなわちタウトニズムというものが、「宇宙空間的平和」と「無の哲学」の発展に向っていることがよくわかる。なんという予言に満ちた今日的言葉ではないか、と思わせられるのである。

洗心亭とタウト碑
著者の右は広瀬住職。

三倍楽しく読める読書体操

1・4・11(後半)・7・10・2・11(前半)・3・5・9・8・12・6!!

これですべて読みきった。厚い本になるとページがなかなか進まない。シオリを入れたところがひどくアンバランスになっている。読んだ部分は薄く、のこったほうはいやに厚く感じるものである。私の読書術でいくと、シオリはいつも踊っているように中間にあったり、末尾にとんだり、とんぼ返りでまえにもどったりしているが、確実にタウトの世界にはいっていくことはできる。違ったタウトをあちこちで発見できることは楽しいものだ。天才的なタウトにえりを正しながら、一方でエリカに、特急のなかではステテコ姿はいけません！、とたしなめられるタウトに出合うと、急に親しいタウトが笑いかけてくるようである。日記にでてくる500人の日本人は、タウトから眺めた人々であるには違いないのだが、きわめて客観的な書きぶりになっている。生存している人たちの記述や語りかけと比較してみるのも興味ある研究材料になるだろう。

私の読書術をひととおりこなしたあとで、暇ができたら1ページから通して読んでみることを勧めたい。また異なる興趣がでてくるはずである。そのときは、読書スピードを、トップ・ギアに切り換えても大丈夫、もう基礎ができているから。三度目をごらんになる方はいないと思うが、もしその気がおありの熱中者には、必ずタウトが、これまでと違った顔であらわれてくる。それは研究者のあなたに新しいテーマを授けてくれること請合いである。

三倍楽しく読める読書術、ということで書いてきた。あっという間にこの大著を読んでしまったが、さて実際は？ということになる。①－④－⑪(後半)－7－⑩－2－⑪(前半)－3－5－⑨－8－⑫－6。この数字は章をあらわしている。この順に読み進んでいくと○で囲んだところは読みやすく、ときに興味深い読物であることに気がつく。

さらに2章と3章を除くと、5・6・7・8・の固い調子と思われる各章も、タウトの日記文によって救われていることにほっとするのである。この数字をもとにページをめくってもらえば、『もうひとりのブルーノ・タウト』は、たちどころに楽しい本に早がわりする。厚い本のまえでタメ息をついているあなた、さあ、1－4－11－7－10－2……といった調子で読書体操をしてみてはいかが。新しいタウトが、快い刺激を前頭葉にあたえてくれるであろうし、読み終ったとき、りっぱなタウト研究者に変身している自分を見出すことができるに違いない。　(終)

『もうひとりのブルーノ・タウト』文明批評家論の創造的提言 読書感想メッセージ集

本書について感想を寄せられた人々の数はきわめて多い。筆者の許だけでも数百を越している。そのなかから比較的新しい読書感想文をここに掲げて、この本の社会的反響の一端をお知らせしたいと思う。なるべく原文を忠実に、と心がけたが、あいさつ的な文章は略し、ときに文中の省略をしたところも若干ある。

なお、掲載は五十音順に、敬称は略させていただいた。

(朝雲久兒臣)

有川美亀男（歌人）

ブルーノ・タウトは群馬県とゆかりの深い芸術建築家であるという程度の知識しかなく、また何回か訪れた洗心亭に対しても好奇心以上の感情を持っておりませんでした。従って御高著の「もうひとりの」という意味に対してまことにお恥しく存じます。

御大著ですから全部拝読し終るには時間がかかると思いますが〈心の表白〉を拝読しまず、細やかで、やさしい御文章に惹かれ、また平形義人大人が著者にすすめられたことを伺い感慨を催しました。内容そのものは、楽しいけれども深くむずかしい部分もあり、そういうところは、大切でありますから何回もくりかえしたいと存じます。

まだ拝読しはじめたばかりですが、例えば〈小さなゆがみ〉など、実に味わい深く、無限の興味を感じます。

先へとんで、〈タウトをめぐる500人の日本人〉の一部も拝読いたしましたが、有島生馬・広瀬敏子さんのことなど、タウトの心がはっきりと感じられて、おもしろい部分でありました。日本との別れの部分も拝読いたしました。

これからは、先を急がず、もう一度時間をかけて、はっきりするまで読み直しをさせていただきます。

思いがけない心の糧をお恵みいただきありがとうございました。

尾崎　梓（きぬ医師会病院院長）

もうひとりのブルーノ・タウト、大変興味深く拝読致しました。思想・哲学の探索者の項が一番読みごたえがありました。

全体としては、日本文化、日本人論になっていると思います。

「実際、しっかりした考えをもっている人達はごく稀だし、しかもその稀な人達がまるきり無気力なのである。」(P300)

「日本の紳士は確かに上品ではあるが、しかし文化的な事柄について正確な判断を下し得る人は極めて稀である。」(P324)

結局、タウト氏は、確たる思想を持ち文化に定見を持った人には会わなかったし、実際にもそのような「教養人」が少なかったのでしょう。これは今でも同じ情況かも知れません。

「50年後の日本は、今よりもっと荒んだ、味気ない国になるだろう。それにしてもこの国は、新しい独自の文化を開花させる可能性を蔵しているのだ。これだけが私の言いうる唯一のことであり、また日本文化に対する唯一の関心事だ。」(P425)

実際にいま、味気ない国になっているのはタウト氏の見事な洞察力ですが、同時に「独自な文化を開花させる可能性」も持っているのは確かなようです。

第2、第3のタウト氏が来ても仲々日本ではうまく行かぬのではないかと思うのですが、貿易摩擦とか××摩擦というのはお互いの思想を点検することが不能な為に起る摩擦なのでしょう。

最近は親日家の中に、日本を十分に理解しながら日本で楽しく暮している者が増えてきたようですが、彼らの考え方、思想に私は注目しています。

以上思いつくままを述べさせて頂きました。朝雲先生のご健康とご発展をお祈り致します。

金沢子卿（高崎書道会会長）

大変なる反響心からおよろこび申し上げます。短期日の内にこれだけの大著を作られたご努力には全く敬服の外ありません。

益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

栗原英也（前・群馬高専教授）

毎日一章ずつ熟読致し、本日読み終りました。これほどの大作をまとめるには随分と多くの資料や文献を集めることが必要であったことかと御苦労の程がしのばれます。

全編を通じてタウトの人となりや物の見方や考え方から日本人との間の微妙な心の食い違いなどもうかがわれて、

終始興味深く読み続けて参りましたが、豊富な語彙を巧みに使いこなして、恰もタウトが日本語が得意で日本語で日記を書いていたような錯覚を起こさせる著者の力量には唯々感服の外はありません。

私はタウトはもっと長い間日本に居たものと思っていましたが、僅か3年半の間に日本各地を巡ってこれだけ多くの人に接して、かくも偉大な足跡を残した人であることを知って、改めて認識を新たにした次第です。

私がブルーノ・タウトという名前を初めて知ったのは、小学校4年生の時に県の小・中学生徒による創案品展覧会に工作品を出品したのが佳作に入選し、その時もらった賞状に記された審査員の中に一人だけ外国人が入っているのを見たときでした。家に帰って父に見せたら、その人は有名なドイツの建築家で少林山に住んでいることを教えてくれました。この度は又貴兄の力作を拝読して、タウトの偉大さを再認識すると共に、これからの国際化時代において我々の考えるべきことについてもいろいろと教えられることの多かったことを篤く御礼申し上げます。

桑田次男（千葉大学名誉教授）

私もドイツ語を好み、ドイツ文学を読んで青春を過ごしましたので、ドイツ文化に強い関心を持ち続けております。ご高著をこれから読まして頂くのは私の大きな喜びです。

古池三沙子（音楽家）

いそがしい仕事の合間のわずかな時間しかとれませんゝ、まだ半ばまでしか読ませて頂きませんが、他に類をみないすばらしい御本で、一人でも多くの方にお読み頂き度いと存じます。ブルーノ・タウトは、唯の建築家で、桂離宮を世界に紹介した方…ということしか知らない人々にとって、先生のこの御著書は、本当に思いがけないすばらしいもう一面を余すところなくお知らせ下さったという意味で、恐らくドイツ国民からも、どんなにか感謝されるのではございませんでしょうか。日独文化交流の大きなかけ橋の役目まで果して下さっていることをしみじみ感じているのでございます。

ますますの御活躍を心からお祈り申し上げております。

木暮剛平（株式会社　電通社長）

読書感想メッセージ集（その2）をご恵贈賜り誠にありがとうございました。

幅広い方々からのすばらしい評価をお喜び申し上げます。

後藤　繁（千葉市在住）

タウトといえば昭和8年、旧制水戸高校時代に丸善でふと手にした写真集にあったのを貧しかった学生の私には自分のものにできなかった無念さが忘れられない思い出です。その後昭和10年病を得て療養生活に入りそのおり療友から「日本美の再発見」を借り読後タウトにのめり込んだのをおもいだします。

折角のご作品です。じっくりと読ませて頂きたいと思います。

島田信勝（慶応義塾大学名誉教授）

「日本医師会雑誌」誌上の書評大変反響があったようで喜んでおります。いくらかでもお役に立てば幸いです。

平形博士からも喜んで小生宛電話がありました。では今後の発展を念じています。

園田和朗（日独協会副会長）

昭和11年頃、小生が旧制高校時にタウトの桂離宮論を手にした時の感動が50数年の歳月を隔てて、昨日のことの様に甦って参りました。

先生の指摘される通りブルーノ・タウトは一建築家というよりは文明批評家として日本文化の理解と紹介に大きな功績があったと思います。貴著によってタウトが日独関係者の間で再認識されることを期待します。

ぐんま日独協会3周年記念大会でハース大使賞により表彰されましたこと誠に御芽出とう存じます。実は小生あの大会に出席致しました後、今回のドイツ出張準備に忙殺され、心ならずも答礼がこの様に遅れてしまいました。

小生7月上旬に帰国しますが、機会があればタウトについて御高説を拝聴したいものです。

高橋英夫（文芸評論家）

御著は驚くべき大作であり、宮下氏が言うようにそれがこの定価で出たことも別の驚きですが、タウト研究の上で貴重な寄与であろうと存じました。

未だ充分な精読には至って居りませんが、タウトを単なる建築論から解放して文明論並びに文学論として考えるという御考に同感します。滞日中のタウトが建築著述家であり、文学的意識も強く、その発言内容も直観的で、おそらくそれもあって当時、石川淳、坂口安吾らを刺戟したと思います。が当時もその後もタウトの真意はよく受けとめられたとは考えられません。そこにタウトを文学批評が取り上げる意味があるでしょう。

御作は日記を活用し、文明論の部分とタウトの人間関係の部分から成っていて興味深く、また今後の考究に大いに裨益する御労作と存じました。拙作は「新潮」に近く載る予定で、御礼までにお送りさせて頂きます。

高嶺　登（医師）

タウトにつきましては、戦前旧水戸高校生の頃、伊豆山善太郎教授の講義によく出てきた人物で桂離宮を絶賛し、日本の文化、日本の美を日本人よりもよく理解していた外人であるくらいの記憶しかありませんでしたが、今またあ

の頃を思い出しながら、この力作を読ませていただき改めてタウトの人物像を知りたいと存じます。

土岐文映（医師・前群馬県医師会長）

『もうひとりのブルーノ・タウト』の書評が日本医師会雑誌に載ったので早速読んでみました。掌編ながら伸々美事にまとめられた親切な書評で流石は島田先生（慶応大学医学部名誉教授・外科学）かなと讃歎致しました。この様に稀にみる大著が全国誌の一つにとりあげられ、私と致しましても同慶に堪えません。

以来続々と読後感が殺到しているものと思います。ご苦心の結果がむくわれてどんなにか安堵とおよろこびでしょう。

島田先生の書評文の中にも富士山の事が第一にとりあげられており、又タウトをめぐる500人の日本人も述べられ、小生の着眼とも一致して大変心強く思います。全国各地で多くの方々がお読みになって、読後感を述べない人がたくさんあるでしょう。いざ筆を執って公にする事は仲々おっくうなことですから。全国に一種のタウトブーム、静かなるブームを惹き起しているものと確信致します。

小生も、もう少しじっくり各章を随意にとり出して読み返してみたいと思っています。

橋爪良恒（高崎白衣大観音・慈眼院住職）

折りに触れて拝読させて頂いております。タウトの日記に即しながらもそれに流されることなく、醒めた目でタウトの未知の部分を浮びあがらせ、読む者をして見たことのないタウトという人間像を髣髴とさせる手腕、さすがと感銘を受けました。又就中、「タウトをめぐる500人の日本人」の章、格別に興趣深く拝読しました。全巻通読の上、又お目にかかってお尋ねしたきこともあり、いずれの時か再会を楽しみにしております。

福間誠吾（千葉市在住）

戦時中、明治書院発刊の「ニッポン」を読み、日本の文化を教えられ感動した事を覚えております。今回、ブルーノ・タウトに再会した感あり懐かしく思われます。遅読でございますので、時間がかかると思いますが、あらためて感想をお届け致すつもりです。

本沢繁二郎（医師）

朝日新聞夕刊で、大きく一面に出ておりましたので、日独関係者はびっくりして「群馬に朝雲先生あり」と驚き、本を買われた事と存じます。

とにかく日を追って価値が高く評され、洛陽の紙価を高められるのを感じ、共に喜びたく、もう一度会を持ちたいくらいです。

丸山芳郎（日独協会会長）

『もうひとりのブルーノ・タウト』の第二回読書感想メッセージ集を御恵与賜り有難く厚く御礼申し上げます。

尚ぐんま日独協会三周年記念大会の席上ハース大使より表彰を受けられた御趣深くお慶び申し上げます。

宮下啓三（慶応義塾大学教授）

御著書が多方面から歓迎されていること、心からお慶び申し上げます。朝雲さんの作品であることを正面に出さずにタウト本人に存分に語らせていることが御著書の何よりの美点であって、それが反響の大きさとなってあらわれているに相違ありません。日独文化交流という視点も大事でしょうが、私としてはタウトの日本に対する諦念を朝雲さんが扱った部分に強く引かれます。日本の理解者としてのタウトの言葉に日本人が良い気持ちになるのは当然で、その部分だけが取り上げられがちでした。しかし、異質の文化の壁を乗り越えられずに苦悩する人の記録としてまとめられた部分こそ、量的には少ないので目立たないかも知れませんが、御労作全編を通じてもっとも含蓄の深い、その意味でいぶし銀の光を放つ箇所であると私は感じています。

467頁の「ツェーレンドルフ・ジードルンク」とは、ベルリン市の西南にあるツェーレンドルフ区の集団住宅地のことでしょう。1966年の秋にその近くでしばらく過ごしたことがあるので懐かしい地名です。

ドイツ大使による御表彰にもお祝い申し上げなくてはなりません。

八木文夫（元三菱重工勤務）

「もうひとりのブルーノ・タウト」の大著早速ひもといて居りますが、随所に目を見張るものがあり、特に「富士山讃歌」等、今までにこれだけ適確に富士山の美しさを述べた文章は他にないと存じます。又その訳文もさることながらタウト氏の文章力にも驚嘆しました。あの頃の日本は私の大学卒業（1936年）時代でタウト氏がこの美しい日本を離れたくなったのも判る気持ちがします。何れにしてもこの御本の内容は記録文学・伝記文学としても圧巻の作と存じますので中央の新聞にて然るべき方の書評を載せられてより多くの人々に読んで頂いたらと存じます。

改めて著者の朝雲氏及び御後援の平形さんに敬意を表します。

（平形会長さんあての書簡から掲載）

ほかに書信を寄せられた知名人（50音順・敬称略）

家崎智（群馬県医師会長）・伊藤正治（医事評論家）・今村晋（元東京医科歯科大学教授）・植村泰忠（武蔵学園長）・江尻進（評論家）・甲斐文比古（ベルリン日独センター初代総裁）・金治勇（四天王寺国際仏教大学名誉教授）・河野

清晃(奈良大安寺貫主)・古池好(武蔵野音楽大学教授)・木暮剛平(電通社長)・清水正嗣(大分日独協会理事長)・西山宏(米国シンシナティ大学医学部教授)・萩原進(郷土史家)・東山魁夷(日本画家)・平形義人(ぐんま日独協会長)・福沢一郎(洋画家)・藤田真之助(東京逓信病院名誉院長)・前田文雄(東和銀行頭取)・松田源治(長崎日独協会長)・松村憲一(早稲田大学教授)・山崎太圭始(ＨＬＷ研究所長)。内容はメッセージ集その一、その二に掲載されている。

新聞、雑誌等に広く紹介された本書は、
国の内外で大きな反響をよんでいる！
そのいくつかを掲げて参考にしたい。

■朝日新聞の「現代人物誌」に「いま新鮮、タウトの文明批評」という標題のもとに著者が次のように取りあげられた。（1991年４月５日付夕刊）

「人は、思いもかけない機会に、大きなテーマをつかむことがある。朝雲さんの場合もそうだ。ユンク駐日ドイツ公使一行が二年前、高崎市西郊の少林山達磨寺を訪れ、ぐんま日独協会の人たちと懇談した。そのお茶席で、地元の一人がいった。〝皆さん、二年余も少林山ですごしたブルーノ・タウトをしのんで瞑想したいと思いますが〟同席の朝雲さんは、はっとした。〝タウトか〟

一年半後の昨年秋。大冊『もうひとりのブルーノ・タウト』（上毛新聞社刊）を書き上げる。滞日中の日記に登場する日本人485人との関係を分析し、文明批評家としての新しいタウトを描いた。タウトは当時すでに日本の農漁村の美しさ、景観やアメニティーに触れている。本には全国から反響があった。

建築家タウトは1933年、ナチスを逃れて日本へきた。桂離宮を見て〝泣きたくなるほど美しい〟と記す。滞日三年余。その大半を達磨寺内の洗心亭ですごし、『日本美の再発見』など数々の名作を書いた。

洗心亭は六畳と四・五畳の二間だけだ。〝例の床の間です〟と朝雲さんが指さした。タウトは日記に書いている。〈この床の間には掛け物がかかっているし、花が生けてある。ところが、その裏側は便所、生理的要求を満たすための場所だ。こちら側は芸術と文化のための場所である。だが今、裏側の(野蛮な)世界が大砲を擁して、表側の世界に服従を要求している〉

著書に『高崎風土記』ほか。国鉄を中途退職し、この25年間地元で小説や評論を書いてきた。あのお茶席の後、タウトが村の子どもたちと散歩した道を50余年後のいま、もう一度たどってみた。と、かつて以上に新鮮に思える日本への提言やタウトの姿が浮かび上がってきた。その感動がまだ冷めない。（文・畦倉　実　写真・上田頴人）」

■書評雑誌『みすず』の「1990年読書アンケート特集」に、宮下啓三教授(ドイツ文学者)がつぎのような推薦文を同誌に発表した。（1991年１月号）

「日本の風土と建築に理解の目を向けたドイツ建築家タウトが、日本でだれと交際し、どのような経験をし、その経験をどのような文明論に発展させていったかを詳細に綴った異色の大著。タウト論であると同時にタウト文集でもあって、筆者自身の論が先走ることなく、たっぷりとタウト自身に語らせるという編集の態度が好ましいし、群馬県にゆかりのあったタウトに寄せる群馬県人の愛情まで感じとれるこの大著がわずか3,500円であるということ自体が、書籍代の高い今日では感動的でさえある。」

■『日本医師会雑誌』の「論説と話題」の頁に、島田信勝・慶応義塾大学名誉教授の名前で、〝もうひとりのブルーノ・タウト〟と題する書評が掲載された。そして全国の医師達にタウト文明批評家論が、大きなブームをまきおこした。（1991年６月１日号）

■財団法人日独協会の機関誌「Die　Brücke」に、江尻進副会長の署名入り書評が、つぎのように掲載され注目を集めた。（1990年12月25日発行）「桂離宮の建築美を、〝ギリシャのアクロポリスに匹敵する〟と、世界に紹介したドイツの建築家ブルーノ・タウトを、文学者という〝もうひとり〟の立場から見直して、その知られぬ実像を浮き彫りにした大著である。タウトの来日後２年余を高崎に住んだゆかりのあるぐんま日独協会が、〝国際交流の振興に役立つ〟と企画、協賛し挙行した。

■ハース大使（ドイツ連邦共和国）から表彰された著者。表彰状の全文はつぎのとおり。

26-April-1991

表　彰　状

朝雲　久兒臣殿

「もうひとりのブルーノ・タウト」を
発刊され　群馬の日独交流の歴史の発掘
と　タウトブームを日本に起こす魁と
なられた
その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使
Wilhelm Haas

（推薦　ぐんま日独協会長平形義人）

本書の規格・体裁その他

Ａ５判681ページ・箱入り上製本・定価3,500円（税込）送料360円・発行/上毛新聞社・企画協賛/ぐんま日独協会・編集協力/風土記出版委員会

申込先

ぐんま日独協会〒371 前橋市三俣町３—11—12
☎0272—31—7212　ＦＡＸ0272—32—4082
風土記出版委員会〒370 高崎市八幡町768—30
☎0273—43—9126

ドイツ連邦共和国WILHELM HAAS 大使表彰

表彰者一覧表

平形義人（会長）
中沢晃（副会長）
小林斎（〃）
木暮金太夫（〃）
中村・鉦（〃）
佐藤進（事務局長）
対馬良一（理事）
須郷登世治（〃）
石井正人（理事）
伊藤塩子（〃）
上原喜代子（〃）
田口久美子（〃）
関口陽（〃）
小野里光明（〃）
塚越平太（〃）
古屋賀津子（監事）
黒田とめ子（〃）

27-Juni-1993

表彰状

平形 義人殿

あなたは１９８８年４月のぐんま日独協会設立以来今日まで会長の要職に在り平先協会の充実・発展に尽力され 会務に精励され 日独親善交流に貢献されました その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

中沢 晃三殿

あなたは Erwin von Ball 博士の研究に根ざす多年の日独交流の体験に基づき１９８８年ぐんま日独協会設立以来副会長として協会の充実・発展に尽力せられ 特に草津ベルツ協会々長 草津・ビーティヒハイム・ビッシンゲン市との姉妹都市締結 日独ロマンティック姉妹街道結成等 日独親善交流に貢献されました その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

小林 斎殿

あなたは１９８８年ぐんま日独協会設立以来副会長に推され DORIS夫人と共に活躍され特に１９９２年 『異文化の接点』 (Berührungspunkte der Kulturen) を著わされ 日独文化交流のパイロットとなられました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

木暮 金太夫殿

あなたはぐんま日独協会副会長として協会の充実・発展に寄与され 特に Dr. Erwin von Ball の日本紹来論に則り伊香保温泉に「ベルツの湯・日本温泉資料館」を造り 前橋において「ぐんま国際温泉フェスティバル」の開催に尽力され 日本温泉科学々会の会長をつとめる等 日独親善交流に貢献されました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

中村 鉦一殿

あなたは１９８８年ぐんま日独協会発足以来 協会の充実・発展に尽力され副会長となり 又 １９９１年以来協会事務所を提供下され 特に会報の発行に寄与されました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

佐藤 進一殿

あなたは１９８８年４月のぐんま日独協会設立に歩神され 以来今日まで事務局長の要職に在り特に群馬県医師会報に日独交流記事を連載する等 日独親善交流に献身されました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

対馬 良一殿

あなたは １９５８年より３年間東京医科歯科大学教授としてルール地方に駐在以来親独の情深く １９８８年ぐんま日独協会発足するや役員となり 常先して会員の融和・団結に尽力され 日独親善交流に貢献されました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

須郷 登世治殿

あなたは１９９１年『ドイツ憲法の解説』を著わし、ゲンシャー・ドイツ外務大臣に贈呈し、又１９９２年『日本語解説付きドイツ写真集』を願い綿な努力に依り完訳カラー製本されドイツ大使に献上する等 日独親善に努められました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使

27-Juni-1993

表彰状

石井 正人殿

あなたは１９８８年ぐんま日独協会発足以来協会役員として会務に精励され 協会の充実発展に寄与され 日独親善交流に貢献されました

その功を称え表彰します

ドイツ連邦共和国大使